たまのよこやま

(財)東京都埋蔵文化財センター報　No.12　昭和63年3月25日

特集　多摩ニュータウンNo.471遺跡

No.471遺跡発掘調査風景

市民の関心と遺跡調査

事務局長　土屋道生

私が少年時代を過した三重県中央部のある町では、桑畑などで石器を拾うということは、決して珍しいことではなかった。戦中・戦後の混乱期のせいもあったが、子供達が石器のコレクションを作っても、それに興味を持つ大人もなく、学校の教師でさえ、さほど関心を示していなかった。

やがて敗戦を迎え、学制が変り、新制中学第一回生となった私達は、社会科の中で日本の歴史を学ぶこととなったが、皇国史観に支えられた「国史」に対する反省もあってか、当時の教科書には「日本人がこの列島で生活するようになってから、まだ三千年位しかたっていない」と記述してあったように覚えている。そのころ、すでに岩宿の石器の話も伝わっていたが、担任の教師は「あれは何かのまちがい」の一言で片づけていた。

ところで、ここ多摩ニュータウンの地には、四～五万年前の遺跡もあるし、本号のテーマであるNo.471遺跡も、三千年前よりもっと古い。四十年前の社会科の教科書の記述とは較べようもないが、それ以上に私の心を打つのは、一般市民の遺跡に対する関心の高まりである。

このことは当センターの充実、発展に必要不可欠のことがらだからである。

市民の皆様の一層の御支援をお願いする次第である。

多摩ニュータウンNo471遺跡（縄文時代中期遺構分布図）

縄文時代の家々

稲城のムラのルーツ

多摩ニュータウンNo.471遺跡は、京王線若葉台駅の北方約五百mの稲城市坂浜に位置し、多摩川の支流である三沢川によってつくりだされた谷と細い尾根上に広がっています。

調査は'86年の7月から開始され現在もなお継続中ですが（'88年3月現在）、これまでの約4万㎡にわたる広域な調査によって、縄文時代の家の跡（住居跡）41軒と、当時の人々が使っていた土器や石器等が多数みつかっており、この地に約4500年前頃（縄文時代中期）のムラ（集落跡）がつくられていたことがわかってきました。そして今、稲城のムラのルーツが解き明かされようとしています。

縄文時代の人々が何故この地にムラをつくり、どんな家に住み、どのような生活をおくっていたのか、これまでの調査成果を中心にお話していきましょう。

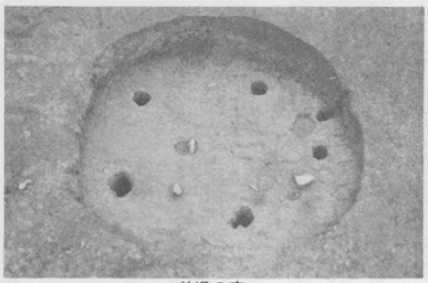
斜面のムラ　尾根のムラ

ムラは、はじめ遺跡の南側に張り出した尾根の先端部から斜面部にかけての地区につくられました。付近はかなりの急斜面地ですが、南向きの陽当りのよいところで、3～5軒の家が建てられていたようです。尾根上に平坦な所があるにもかかわらず、あえて斜面地に家を建てているのは何故なのでしょうか。きっと現代人には理解しにくい、当時の人達の生活の知恵があったのでしょう。

次の時代になると、ムラは北側の馬の背状になった細い尾根上に移ります。しかし、ここでも尾根上の平坦な所には家を建てず、尾根際のふちに一列に並ぶように家を建て、尾根をぐるりととり巻くように30数軒の家の跡がみつかっています。このような規則的な家の配置は、尾根上の平坦な所がムラの共同的な広場として使われ、とってきた獲物をみんなで分けあったり、お祭りなどを行った広場として使われていたためによるものと考えられています。

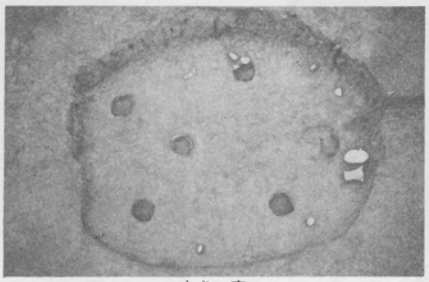
縄文人のリハウス

縄文時代の家のほとんどは、地面を縦に深く掘り込んだ半地下式構造の「竪穴住居」と呼ばれるものです。このムラでは斜面地に家を建てているために、竪穴の断面が「ちり取り状」になっていますが、家の中には柱を埋め込んだ穴（柱穴）と、囲炉裏の跡（炉跡）がみつかっています。囲炉裏には、土器を埋め込んだものや、石で囲ったものなどもあり、それぞれ火持ちをよくする工夫がなされています。



普通の家

屋根には、おそらくカヤのようなものがふかれていたと思われますが、このような家では、5～10年もたつと柱や屋根が腐ってきてしまい、家の建てかえ（リハウス）が必要になってきます。また、住む人が増えてくれば、家を増築したり新築したりもしなければなりません。そのために、縄文人たちは一生の内に何回も家をリハウスしていたようです。どうやらこのリハウスの結果が、41軒もの家の跡として、現在私たちの



大きい家

前に姿を現わしてきているといえそうです。これらの点を考えると、一時期にこのムラに建てられていた家の数はせいぜい5軒前後ではなかったかと考えられています。

大きい家・小さい家

当時の家の跡をもう少し詳しくみていくと、このムラには大きく分けて3つの違ったタイプの家があったことがわかります。一つは平面形の直径が4m程の円形になる家です。このタイプの家が最も多く一般的であったようです。広さは畳にして8畳位の1DK、およそ4～5人が住むことができたようです。

もう一つは、それよりひとまわり大きく、長径が5m程の楕円形になる大きい家です。住んでいた人の数も多少、多かったのかもしれません。三番目は、直径が2m前後の円形になるかなり小さな家です。この家はムラから少し離れたところからもみつかっていることから「産小屋」とか何か普通の家とは違った機能をもっていたのか、あるいは独身の家だったのかもしれません。

いずれにせよ、この3つのタイプの家がいくつかずつ組み合わさって、このムラを構成していたようです。

水はどこから

このように、尾根上の高台（標高約125m）にムラをかまえていた人々は、日常生活に最も必要だと思われる水をどこから得ていたのでしょうか。遺跡の北側のはずれの谷には、現在でもコンコンと水が湧いている湧水地があり、三沢川に流れ込んでいます。おそらくこの湧水を縄文人達も使っていたことでしょう。

しかし、毎日尾根の上から湧水までおりていって水を運んでくるということは大変な仕事です。にもかかわらず、あえてこの高台の地にムラをつくったのは何故なのでしょうか。

山の貝塚

「土器捨て場」

縄文時代の人々は、ゴミをきちんと決められた場所に捨てていたようです。海の近くのムラではこれを「貝塚」として残しました。丘陵地では貝は採れませんので貝塚こそありませんが、貝塚と同じようなものに「土器捨て場」と呼ばれるゴミ捨て場があります。このムラでは、ムラはずれの4ヶ所の斜面地からみつかっており、当時の生活の一端をうかがい知ることができます。

「土器捨て場」からは、当時使っていてこわれてしまったもの、あるいはいらなくなったものなど土器や石器を中心とした日常の生活品の数々が出土しています。そのほとんどはすでにこわれてしまったものですが、中にはまだ使えそうなものも混っています。

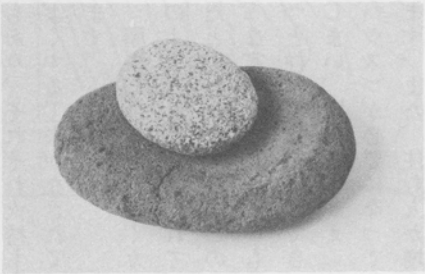
また、「土器捨て場」は当時のゴミ捨て場ですから当然ムラの人々が食べた食べかすも含まれていたはずです。しかし、そのほとんどは長い時間の中で土にとけてしまい、私達の前に姿を現わしてくれません。そこで今回は、土器捨て場の土を水で丁寧に洗ってふるいにかけたところ、クルミの殻や小魚の骨がみつかっています。

土器捨て場

ドングリが主食

このことは、このムラの人々がクルミや小魚を食べていた何よりの証拠です。おそらく当時の主食は、ムラの周囲の森からとれるクリ・クルミ・ドングリといった木の実（堅果類）であったと思われます。このことは、木の実などを磨りつぶした当時の製粉具である「石皿」や「磨石」の出土からも明らかです。

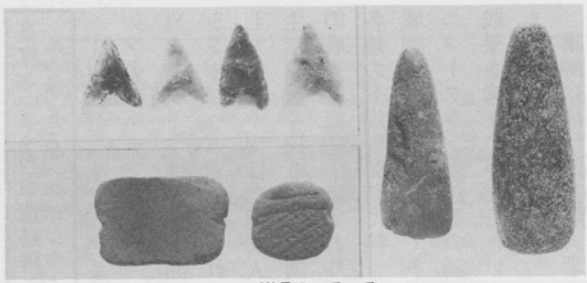
遺跡の北側を流れる三沢川では、網を使った魚採りも行われていたようです。土器のかけらを使った網のおもり（土錘）がみつかっ



石皿と磨石

ており、これで小魚などをとっていたのでしょう。

また、黒曜石と呼ばれる石で作られた矢じり（石鏃）も多数出土しています。これは狩猟の飛び道具である弓矢が使われていたことを示しており、これでシカやイノシシなどをとっていたようです。しかし、シカやイノシシはそう簡単にたくさんとれるものではないので、たまにとれた時にはムラ人全員で分けあっていたと思われます。



道具のいろいろ

安産の御守り「土偶」

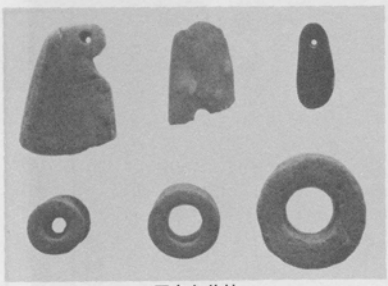
このムラからは、今までみてきた生業活動の道具以外に、土偶と呼ばれている土でつくられた小さな人形がみつかっています。この土偶が何のために使われどういう役目を果たしたものなのかはまだはっきりとわかっていません。しかし、そのほとんどが妊娠した女性を表現しているところから、安産の御守りとして、あるいは生命誕生の神秘さにもとづく再生・多産・豊かなる獲物などにまつわるおまじないの一種として使われていたと考えられています。

土偶

土偶はこれまでに顔1点・腕1点・足3点・胴部1点がみつかっていますが、いずれも破片で完全な姿で残っているものはありません。

縄文人のアクセサリー

縄文人は、現代人以上におシャレであったようです。このムラからも装飾品がいくつか出土しています。中でも、硬い石を磨いてつくったペンダント（垂飾り）や耳たぶに穴をあけて通したピアスのオバケのような耳飾り（耳栓）が目をひきます。また、髪の毛をゆっていたことも土偶のようなどからわかります。



アクセサリー

縄文時代のニュータウン

多摩ニュータウン地域内には、これまでの調査で900箇所以上の遺跡があることがわかっています。このうち、このムラと同じ頃（縄文時代中期の中頃）の遺跡は、およそ100箇所程もあります。しかし、そのほとんどは当時の人々が狩りをしたり、木の実等を採集するために一時的にキャンプしたような小さな遺跡で、この遺跡のように、家の跡が何十軒も集まった大きなムラの跡はわずかに5・6遺跡しかありません。しかもそのいずれもが、稲城市を中心とした三沢川流域に集まっていたようで、およそ2～3kmおきに大きなムラが点在していました。おそらく当時、この地域が非常に住みやすいところだったのでしょう。

ニュータウン地域では、稲城地区の開発は一番最後のようですが、こと縄文時代においては、早くから大きなムラがつくられていたようで、歴史的にみた時、縄文時代のニュータウン開発は、この稲城地区からはじめられていったようです。

しかし、これらの縄文時代のムラも、現在のニュータウン開発によって次々と姿を消していってしまいます。私達は、過去の上に現在があり、現在から未来へ進むことを知っています。そして、現在に生きる私達が、これまでみてきたような縄文人達の足跡を、単なる過去の産物とするのではなく、未来への遺産として次の世代へ正しく伝えていかなければならないことも知っています。

（小薬、甲崎、長佐古）

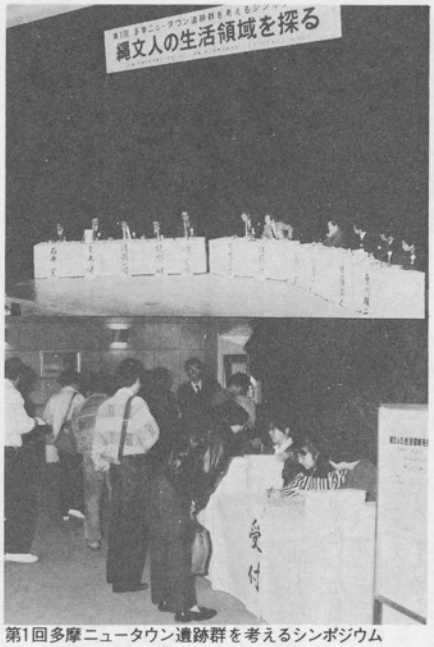
土器の出土状態

多摩ニュータウン遺跡群を考えるシンポジウム

1月10日（土）、パルテノン多摩小ホールに於いて当センター主催の第1回のシンポジウムが開催されました。テーマは「縄文人の生活領域を探る—広域調査の成果と課題—」であり、各地の大規模開発に伴う広域調査の成果と併せて多摩ニュータウン遺跡群の調査成果を考えていこうというものです。

講師には、国学院大学小林達雄先生、北海道埋蔵文化財センター畑宏明氏、群馬県教育委員会能登健氏、山梨県埋蔵文化財センター末木健氏、市原市文化財センター清藤一順氏、横浜市埋蔵文化財調査委員会石井寛氏を迎え、これに当センターから可児通宏、佐藤攻、小薬一夫、原川雄二、佐藤宏之が加わりました。

当センター初のシンポジウムでもあり、担当者は何回もテーマについての検討を重ね、当日に臨みました。当日の参加者は、近県の考古学関係者を中心に220名にも上り、盛況のうちに終りました。今回のシンポジウムを機会に多摩ニュータウン遺跡群に対する人々の関心が一層、高まっていくものと思われます。



第1回多摩ニュータウン遺跡群を考えるシンポジウム

外国人考古学者の来所

昨年8日26日、ソ連科学アカデミーのゾーヤ・アブラモワ氏が来所されました。11月16日には、同じくシベリア支部のアナトリーパンテレビッチ・デレビャンコ所長を代表とする一行6名が来所され、視察の後、センター職員と意見交換を行いました。

ソ連科学アカデミー　デレビャンコ所長一行

また、本年1月26日、韓国扶余博物館館長金誠亀氏が来所され、施設、資料の見学をされた後、「7世紀代の新羅瓦当の変遷」と題する講演をしていただきました。

全国埋文協役員会

全国埋蔵文化財法人連絡協議会の昭和62年度第2回役員会が11月11・12日に東京都大島町元町コミュニティセンターで開催されました。一日目は報告・協議、二日目は現地研修という日程で終えました。

トピックス

10月22日　昭和62年度第18回東京都教育委員会定例会が当センターで催されました。出席者は委員会終了後、センター施設や縄文の村を視察されました。

10月31日　第2回縄文土器づくり教室をこの日と11月1日・11日に開きました。

文化財防火デーの訓練

1月26日　文化財防火デーの行事として、多摩消防署の消防車の応援を得て自衛消防隊による放水訓練が遺跡庭園で行われました。

2月21日　東京都遺跡調査・研究発表会が行われ、当センターからは舘野孝、小薬一夫が発表しました。

3月12日　この日から3月27日まで展示替えのため展示ホールは休館です。

人の動き

▼昨年12月1日付で千村洋一朗事務局長が東京都多摩教育事務所へ、その後任に都教育庁から土屋道生が就任しました。

▼調査研究部渡辺克彦さんが11月15日付で退職され、12月1日付で伊藤健さんを迎えました。

発行
財団法人 東京都埋蔵文化財センター
〒206　東京都多摩市落合1—14—2
☎ 0423—73—5296
0423—74—8044
昭和63年3月25日